

「<表象>のパスカル」第1回公開研究会

パスカルと動物の魂——動物機械論と『パンセ』

2015/07/25 山上浩嗣（大阪大学）

周知のとおり、モンテーニュは、『エッセー』第2巻第12章「レーモン・スボンの弁護」で、動物に言語や理性を認め、一部の動物の徳を賞讃することで、動物がいかなる点においても人間に劣るものではないことを、Villers-Saulnier 版で 26 頁にわたって主張している (p. 452-486)。パスカルは『エッセー』の熱心な読者であったにもかかわらず、モンテーニュの動物観を受けつがなかった。パスカルの著作における『エッセー』からの影響関係を徹底的に調査したベルナール・クロケットの研究書『パスカルとモンテーニュ』(*Pascal et Montaigne. Étude des réminiscences des Essais dans l'œuvre de Pascal*, Genève, Droz, 1974) によると、『パンセ』のなかで、語彙や発想の点で『エッセー』からの影響が明白な箇所はのべ 238 箇所ある(『エッセー』の同じ一節が、『パンセ』の複数の場所に影響を与えている場合がある)。うち「レーモン・スボンの弁護」との関連箇所は 74 で約 3 分の 1 にのぼるが、そのなかのモンテーニュの動物論にあたる部分から想を得たとみられる箇所は 8 つある。だが、そのいずれにおいてもパスカルは、動物の魂(精神、理性)に関するモンテーニュの思想に一切言及していない。蚊(mouches)との戦いに負ける人間の虚弱さ(S56-L22)、人間も動物と同様に生きて死ぬこと(S183-L150)以外は、内容に関係なく、若干の語彙や言い回し(« il ne faut point », « suffisants » など)が共通するのみである。パスカルはモンテーニュの動物観に無関心であったどころか(前田、142-)、あえて忌避していたようにさえ見受けられる(詳しく述べる余裕はないが、パスカルの文章のなかには、モンテーニュと正反対の見解がいくつかある¹⁾)。

17 世紀思想界は一般に『エッセー』を冷遇したし、ポール=ロワイヤルはモンテーニュに強く反発した(参照:前田陽一『モンテーニュとパスカルとのキリスト教弁証論』東京創元社、1989 年、第一部第一章第二節「パスカルの時代に至るまでの『スボンの弁護』に対する批評の変遷」26-37 頁)。A・アルノーと P・ニコルによる『論理学あるいは思考の技法』(通称『ポール=ロワイヤル論理学』)は、「自己愛、利得、情念に起因する詭弁」(« Des sophismes d'amour propre, d'intérêt, et de passion »)について論じる際にモンテーニュを再三引き合いに出して非難している²⁾。なかでも著者たちは、「レーモン・スボンの弁護」における動物論に触れてこんな言葉を記している。

[01] Arnauld et Nicole, *La Logique ou l'art de penser*, éd. D. Descotes, 2014, III, 19, p. 475

Veut-il [= Montaigne] détruire l'avantage que les hommes ont sur les bêtes par le commerce de la parole? Il nous rapporte des contes ridicules, et dont il connaît l'extravagance mieux que personne, et en tire des conclusions plus ridicules [...].

彼 [モンテーニュ] は、人間は言葉を交わす能力をもつがゆえに動物よりも優れている

るとの考えを否定したいのだろう。誰よりもその荒唐無稽さを知りながら、馬鹿げた作り話を披露し、そこから滑稽千万な結論を導き出すのだ。

パスカルのモンテーニュに対する姿勢は批判一辺倒ではなく複雑であるが、こと動物の魂の問題に関しては、ポール＝ロワイヤルの認識を共有していたようだ。

一方、『パンセ』には、パスカルが、動物が精神を欠いた機械であると考えていたことがうかがわせる断章がいくつかある。

02 S137-L105

Si un animal faisait par esprit ce qu'il fait par instinct, et s'il parlait par esprit ce qu'il parle par instinct pour la chasse et pour avertir ses camarades que la proie est trouvée ou perdue, il parlerait bien aussi pour des choses où il a plus d'affection, comme pour dire : « Rongez cette corde qui me blesse et où je ne puis atteindre. »

もしある動物が、狩りの最中に獲物を見つけたとか見失ったとかを仲間に知らせようとして、本能ではなく精神によって行動し、本能ではなく精神によって語っているのだでしょう。するとその動物は、もっと切実なことがらについてもはっきり話すことだろう。たとえばこんなふうに。「痛いよ、この縄をかみ切ってくれないか。ぼくには手が届かないんだ。」

もし動物に本能だけでなく精神 (esprit) が備わっていれば、動物は仲間に「痛いよ、この縄をかみ切ってくれないか。ぼくには手が届かないんだ」などと言って助けを求めることもできるだろうというのである。この一見ほほえましい断章からは、人間と動物を截然と区別する視点がうかがえる。その区別は、第一に、動物には本能しか備わっておらず、思考や感情 (« affection ») を生み出す精神をもたないこと、第二に、言語をもたないこと、に由来する。

次の断章はまた、意味もなく同じ動作をくり返す態度に、オウムの機械性を認めているようだ。

03 S139-L107

Le bec du perroquet, qu'il essuie quoi qu'il soit net.

オウムはくちばしを、いくら清潔でもたえず拭いている。

パスカルがこの見地を受け継いだのはデカルトからであると説明される³、実際に彼がデカルトの機械説を承認していたとの証言が、デカルトの伝記作者アドリアン・バイエ⁴や、パスカルの姪のマルグリット・ペリエによって伝えられてもいる。マルグリットの証言は次である。

04 Marguerite Périer, *Mémoire sur Pascal et sa famille*, MES, I, p. 1105

Il [= Pascal] parlait peu de science ; cependant, quand l'occasion s'en présentait, il disait son sentiment sur les choses dont on lui parlait ; par exemple sur la philosophie de M. Descartes il disait assez ce qu'il pensait. Il était de son sentiment sur l'automate, et n'en était point sur sa matière subtile dont il se moquait fort.

彼 [パスカル] は科学についてはほとんど語らなかつた。だが、機会が与えられるたびに、尋ねられたことがらについて意見を披露した。たとえばデカルト氏の哲学についても、しばしば考えを述べた。デカルト氏の自動人形に関する説については合意するが、彼の言う微細な物質については我慢がならず、まったく受け入れられないと言っていた。

しかし、機械論的自然学の体系を構想し、その一部として動物機械論を位置づけようとしたデカルトの意図⁵を、パスカルはまったく共有していない。04のマルグリットの証言にも、パスカルがデカルトの語る「微細な物質」にはまったく無関心であったことが示されている。この「微細な物質」とは、デカルトが生命の機械論的説明を徹底させようとして導入した「動物精気」のことだと理解できるであろう⁶。また、パスカル自身こう語る。

05 S118-L84

(Descartes.

Il faut dire en gros. « Cela se fait fuir figure et mouvement », car cela est vrai. Mais de dire quelles et composer la machine, cela est ridicule, car cela est inutile et incertain et pénible. Et quand cela serait vrai, nous n'estimons pas que toute la philosophie vaille une heure de peine⁷.)

デカルト。

大ざっぱにこう言うべきである。「これは形と運動からなっている」と。なぜなら、これは事実だからだ。だが、それがどういう形や運動であるかを語り、機械を構成してみせるのは滑稽である。そんなことは無益であり、不確実であり、骨が折れるからだ。それに、たとえそれが事実であったとしても、われわれは、哲学全体が一時間の労にすら値するとは思わない。

大まかに言えばすむのであって、機械がいかに成り立っているかを語るのには「滑稽だ」とさえ言う。それでは、パスカルはデカルトから何を受け継ぎ、何を拒絶したのか。パスカルの動物機械論はどのような意味をもつのだろうか。また、この説への同意が『キリスト教護教論』（以下『護教論』と略す）で示唆されるときに、パスカルはいかなる意図を込めたのだろうか。

1. デカルトの動物機械論

まずは、デカルトの動物機械論を簡単に見てみよう。

デカルトにとって動物は、理性を欠いているがゆえに機械と区別がつかぬという。

[06] Descartes, *Discours de la méthode*, 5, AT, VI, p. 56 (l'orthographe modernisée)

[...] s'il y avait de telles machines, qui eussent les organes et la figure d'un singe, ou de quelque autre animal sans raison, nous n'aurions aucun moyen pour reconnaître qu'elles ne seraient pas en tout de même nature que ces animaux [...].

猿またはどれかほかの、理性をもたぬ動物と、まったく同じ器官をもちまったく同じ形をしているような機械があるとすると、その機械がそれら動物とどこかで違っているということを認める手段をわれわれはもたないであろう。

デカルトによれば、獣たちは時計と同じようにばねによって自然に動くのであり、彼らわれわれ人間よりもすぐれている点があるとしても、それは時計がわれわれの判断よりも正しく時間を伝えるのと同じなのである⁸。

デカルトにとって、人間と動物を区別するのは、言語能力の有無である。動物は言葉を発しうるが、その言葉は人間の言葉とは違って、他者への伝達的手段とはなりえない⁹。デカルトはこの事実を、動物が理性をもたないことの結果と見る。動物は人間よりも「より少ない理性」をもつのではなく、それを「まったくもたない」のである。人間と動物の間にはこうして、量的差異ではなく質的差異がもうけられることになる。

[07] *Discours de la méthode*, 5, AT, VI, p. 58 (l'orthographe modernisée)

Et ceci ne témoigne pas seulement que les bêtes ont moins de raison que les hommes, mais qu'elles n'en ont point du tout. Car on voit qu'il n'en faut que fort peu, pour savoir parler ; et d'autant qu'on remarque de l'inégalité entre les animaux d'une même espèce, aussi bien qu'entre les hommes, et que les uns sont plus aisés à dresser que les autres, il n'est pas croyable qu'un singe ou un perroquet, qui serait des plus parfaits de son espèce n'égalât en cela un enfant des plus stupides, ou du moins un enfant qui aurait le cerveau troublé, si leur âme n'était d'une nature du tout différente de la nôtre.

以上のことは、獣が人間よりも単に少ない理性をもっているということではなく、獣が理性をまったくもっていないことを示している。というのも、話すためにはほんの少しの理性があればよいのは明らかだからだ。また、人間同士と同じく同種の動物間にも差異があり、調教しやすい個体もあればそうでない個体もある以上、それぞれの種のなかでもっとも完全な猿やオウムですらも、もっとも愚かな人間の子に、もしくは少なくとも、脳に障害をもつ子に、言語能力の点でかなわないという事実は、もし動物の魂がわれわれの魂とまったく異なった性質のものでないとすれば、とうてい信じられないのである。

『方法序説』第5部は、この事実から、動物には不死の魂が存在しないことを導いてくる。人間に認められる理性をともなう魂は、身体からは完全に独立したものでなければならない。したがって、「理性的魂」« *âme raisonnable* » は身体とともに死なないのである。

08 *Discours de la méthode*, 5, AT, VI, p. 59 (l'orthographe modernisée)

[...] il n'y en a point qui éloigne plutôt les esprits faibles du droit chemin de la vertu, que d'imaginer que l'âme des bêtes soit de même nature que la nôtre, et que, par conséquent, nous n'avons rien à craindre, ni à espérer, après cette vie, non plus que les mouches et les fourmis ; au lieu que, lorsqu'on sait combien elles diffèrent, on comprend beaucoup mieux les raisons, qui prouvent que la nôtre est d'une nature entièrement indépendante du corps, et par conséquent, qu'elle n'est point sujette à mourir avec lui [...].

[...] 動物の魂はわれわれ人間の魂と同質であるがゆえに、われわれも、ハエやアリと同様に、死後に一切の恐れも希望もないのだと想像することほど、弱い精神を徳の正道から遠ざけることはない。これに対して、動物の魂と人間の魂とがいかに異なっているかを知れば、われわれの魂は、身体とは完全に独立した性質をもっているがゆえに、身体とともに死ぬ運命にはないということを立証する理由を、よりよく理解できるのである。

理性の不在、言語の不在、そして不死の魂の不在、これが『方法序説』においてデカルトが動物に認めた特徴である。これまでのところでは、人間と動物の間に質的差異を認め、すべての動物が同列に論じられている。

しかし、デカルトは個別の動物について考えるにつれ、こうした人間と動物との存在論的差異に制限を認めざるをえなくなってくる。ニューカッスル侯宛ての手紙（1646年12月23日付）は、侯の質問に答えるかたちで、デカルトの動物論を構成しているが、そのなかで彼は、われわれのものよりも「ずっと不完全なものであるが」、動物に「なんらかの思考」を認めうることを示唆する¹⁰。

09 Descartes, Lettre au Marquis de Newcastle, 23 nov. 1646, AT, IV, p. 576 (l'orthographe modernisée)

On peut seulement dire que bien que les bêtes ne fassent aucune action qui nous assure qu'elles pensent, toutefois, à cause que les organes de leurs corps ne sont pas fort différents des nôtres, on peut conjecturer qu'il y a quelque pensée jointe à ces organes, ainsi que nous expérimentons en nous, bien que la leur soit beaucoup moins parfaite.

ただ、次のように言うことはできるでしょう。獣は、彼らが思考していることをわれわれに確証させるいかなる動作も行わないが、動物の身体器官はわれわれのそれとさほど異なっていないため、動物の器官にも、われわれがみずからのうちに経験しているよう

な、なんらかの思考がともなっていると推測することも可能である——ただし動物の思考は、われわれの思考と比べてずっと不完全なものだが——と。

この推測は、デカルトが人間と動物の間に認めていた質的差異を取り消して、量的差異に還元しかねない大きな変更の可能性を含んでいる。

さらに、同様のほころびが、モルス宛ての書簡（1649年2月5日付）にも見て取れる。デカルトはそこで、動物に人間と同じような精神の存在を認めることこそ最大の先入見だと主張し、ひとまずは動物に思考を否定する¹¹が、直後に「感覚」（« sentiment »：原語では« conscientia »）が動物にもあるかもしれないと認め、さらに、動物ももちうるような「感覚」には「思考」的な要素が介入していることが述べられている。

10 Descartes, *Lettre à Morus*, 5 fév. 1649, *ALQ*, III, p. 885

[...] je ne vois aucune raison qui prouve que les bêtes pensent, si ce n'est qu'ayant des yeux, des oreilles, une langue, et les autres organes des sens tels que nous, il est vraisemblable qu'elles ont du sentiment comme nous, et que comme la pensée est enfermée dans le sentiment que nous avons, il faut attribuer au leur une pareille pensée.

私は、動物が思考することを示すいかなる証拠も見いださない。とはいえ、動物も、目、耳、舌など、われわれがもつ感覚器官と同様の器官をもつ以上、次のことは本当らしく思われる。すなわち、動物もわれわれと同じく感覚をもっていること、そしてまた、われわれがもつ感覚には思考が含まれているのだから、動物の感覚にも似たような思考を帰さねばならないということである。

このように言うことは、動物にもなんらかの思考を結びつけてしまうことにほかならない。ただし、のちに **13** でも見るように、この手紙の終わり部分では、動物に「感覚」と「生命」は認められるが、あくまでも「思考」は認められないと明言されている¹²。これはデカルトの混乱を表すのだろうか。F・アルキエは、デカルトがこうして、一方ですべての感覚の原因を身体器官にあるとみなしながら、他方で感覚に精神的な要素をも認める姿勢を、理解しがたいものとしている¹³。

このように、デカルト説は、時間を経るにつれて、ある意味では精緻化し、ある意味ではいくぶんかの論理的混乱を呈するようになる。しかしながら、彼の思想が伝播していくにつれ、そのような陰影は無視されてしまい、動物機械論は文字どおりに受け取られて大きな議論を巻き起こす。次に、ポール＝ロワイヤルにおいてこの説がどのような反響を呼んだかを概観することにしよう。

2. デカルト主義とポール=ロワイヤル

ポール=ロワイヤル修道院において、デカルト主義が一時大きな流行を生み、とくにその機械論的宇宙観と動物機械論が大きな議論を呼んだことは、広く知られている。とりわけ動物機械論は、隠士たちの間で奇妙な反応を生み出した。ニコラ・フォンテーヌは、パスカルとI.-L. ル・メートル・ド・サシの対話の記録を含むポール=ロワイヤルの回想録のなかで、こう証言している。

[11] Pascal, *Entretien*, p. 84-85

Il n'y avait guère de solitaire qui ne parlât d'automate. On ne se faisait plus une affaire de battre un chien ; on lui donnait fort indifféremment des coups de bâton, et on se moquait de ceux qui plaignaient ces bêtes comme si elles eussent senti de la douleur. On disait que c'étaient des horloges ; que ces cris qu'elles faisaient quand on les frappait n'étaient que le bruit d'un petit ressort qui avait été remué, mais que tout cela était sans sentiment. On clouait de pauvres animaux sur des ais par les quatre pattes pour les ouvrir tout en vie et voir la circulation du sang, qui était encore là une grande matière d'entretien¹⁴.

自動人形¹⁵のことを口にしない隠士はほとんどいなかった。犬を棒で殴ることなど日常茶飯事であった。みなひどく冷静な様子で犬に打撃を食らわせては、犬たちがまるで痛みを感じているというように哀れむ連中のことを馬鹿にしていた。隠士らは、犬は時計であって、殴ったときの鳴き声は、小さなバネのひとつが動いたときに出る音にほかならず、感覚のせいでは生ずるのではないと言うのだった。かわいそうな動物たちは、板の上に載せられて四肢を鉗で留められ、生きたままで切り開かれたり、その血液の循環の様子が観察されたりした。当時はまだそれが大きな話題であったのだ。

動物が「痛み」を感じないものとみなされ、鳴き声は時計のばねの音と同じとみなされる。隠士たちは動物に乱暴を働いたり生体解剖をするのも平気であった。動物には「感覚」(sentiment)がないと考えられたのである¹⁶。

デカルトがパリにやってきて、アルノーが弟子を通じて彼と親交を深めはじめたのが1644年のことである。その後1648年、ポール=ロワイヤル=デ=シャンに引退中のアルノーは、最後のパリ滞在中のデカルトに質問状を送った。修道院近くに『省察』の仏訳者であったリュイーヌ公が住んでいたことも手伝って、デカルト主義をめぐる騒ぎが活発になってきたのはこの後数年間のことである¹⁷。とくに動物機械論は、精神の不死性を正当化し、動物を食することへの罪悪感を和らげ、解剖などの科学実験を可能にするという点で¹⁸、神学と実生活および当時の科学主義的傾向からの要請をうまく満たすとみなされた理論でもあったために、「熱狂を引き起こした¹⁹」のであった。

ただし、こうした反応は、ポール=ロワイヤルにおいて一律のものではなかった。例えば、パスカルの対話者でもあったド・サシは、デカルト主義の潮流からは距離を取っていたし²⁰、

狩猟を好んだリアンクール公ははっきり動物に感覚を認めていたようだ。ニコラ・フォンテーヌは、後年ラ・フォンテーヌが詩文にした公爵の逸話を報告している。それによると、公爵が、彼の二匹の犬がえさを取り合って追いかけたり吠えたりするのを見て、「これが時計と言えますか」と尋ねたのに対し、アルノーは笑いをこらえきれなかった、とある²¹。

パスカルもこのような議論に無関心ではなかった。1640年代の終わりから1650年代のこのころ、彼は真空実験を行い、『真空論』をまとめる一方で、サン＝シランの靈性に触れ、ジャンセニウスの著書『アウグスティヌス』と出会い、父の死をきっかけに妹ジャクリーヌのポール＝ロワイヤル入りを認めるなど、この修道院とのつながりを深めつつあった。1654年11月のいわゆる「決定的回心」を経て、ポール＝ロワイヤル＝デ＝シャンに一時滞在したのは1655年1月である（7日～28日）。『パンセ』には、リアンクール公の反動物機械論的な態度を揶揄する断章が含まれている。

12 S617-L738

L'histoire du brochet et de la grenouille de Liancourt : ils le font toujours, et jamais autrement, ni autre chose d'esprit.

リアンクール公の川カマスとカエルの話。これらはいつもそんなことをするのであって、ほかのことは何もしない。ほかの精神的なことは何もしない。

ここでパスカルは、動物の精神（esprit）を弁護しようとするリアンクール公に対して、マスやカエルがつねに同じ動作しかしないことを理由に反発しているのであろう²²。その意味で、パスカルは動物機械論支持者であった。

しかし、こうしたデカルト現象は、デカルトの動物に関する考察を正確に受けついでいるだろうか。デカルトはたしかに、動物の理性や精神は否定し、思考についても若干の緩和や疑いはあるにしても、進んで認めようとはしなかった。しかし彼は、モルス宛ての手紙で、動物の「感覚」および「生命」については明確に肯定している。

13 Lettre à Morus, 5 fév. 1649, ALQ, III, p. 887

Je passe, pour abrégé, les autres raisons qui ôtent la pensée aux bêtes. Il faut pourtant remarquer que je parle de la pensée, non de la vie, ou du sentiment ; car je n'ôte la vie à aucun animal, ne la faisant consister que dans la seule chaleur du cœur. Je ne leur refuse pas même le sentiment autant qu'il dépend des organes du corps.

長くなりますので、動物に思考が認められないほかの理由は割愛します。ただ、ご注意いただきたいのは、私は思考と言っているのだから、生命や感覚とは言っていないということです。私は、生命は心臓の熱のなかにもみ宿ると考えているので、あらゆる動物に生命を認めています。また、感覚は身体器官に依存するのである以上、動物の感覚についても、認めないわけにはいきません。

感覚を生命をもつ動物が機械にと形容されるとき、それはすでに暗喩でしかないはずであるが、デカルト現象は「機械」(machine, automate)の語をひとり歩きさせてしまった。ポール＝ロワイヤルの学校の子どもたちは、犬が棒で殴られて死ぬときに出す苦しそうな呻き声を聞いて、これはただの機械であるとする教師らの説明に、納得しないこともあったという²³。

実際、デカルトによる「機械」という語の比喩的使用は、後年、ポール＝ロワイヤルを離れて、動物の魂についてのデカルトの思想をめぐる、正統か異端かという神学論争にまで発展させる機縁となった²⁴。H・グイエの研究によると、パスカルの死後も約15年間にわたり²⁵、さまざまな論者が、デカルト思想の是非をアウグスティヌスの思想に照らして判断しようとするようになる。そのときに問題になっていたのが、「感覚」「生命」の二つの規準である。たとえば、イエズス会のイニャス・ガストン・パルディ神父(Père Ignace Gaston Pardies)は、アウグスティヌスによると、動物は人間のような思考し、不死であるような魂はもたないが、それでも動き、感じることのできる生命原理は認められるはずだと主張し、この点でデカルトとアウグスティヌスとの一致を認めなかった。ジャン＝バティスト・デュアメル(Jean-Baptiste Duhamel)にとっても同様である。彼は1672年の著書で、動物には視覚や聴覚があるのだから、苦しみや快樂も感じるのであり、したがって動物は単なる機械ではありえないと主張した²⁶。結局、アウグスティヌスの「生氣論」(vitalisme)がデカルト思想と比較されたときに、デカルトはアウグスティヌスの思想とは相容れないと見なされたのである²⁷。ところが、先ほど見たように、デカルト自身が、モルス宛ての手紙において、感覚と生命を動物に見いだしていたのだ。

3. 『キリスト教護教論』における動物機械論の意義

1) 『パンセ』における動物の位置

さて、パスカルはデカルトから、動物機械論をどこまで受けついただのか。

『パンセ』とデカルトの文章の関連はこれまでにいくつか指摘されているし²⁸、M・ルゲルンは、デカルトとパスカルの間に多くの類似点を提示し、影響関係を推測している²⁹。なかでも、断章S617(L736～L743)を構成する8つの段落がすべて『方法序説』第5部および第6部の読書ノートであり、1661年の秋に姉のジルベルトに書き取らせたものだとする説は興味深い³⁰。『方法序説』第5部は、すでに見たとおり、デカルトの動物機械論がきわめて一般的に述べられていた箇所であり、動物に感覚論や生氣論を適用する余地があるかどうかの反省がデカルトによってまだ加えられていない文章だからである。13は問題の断章S617に属する。パスカルが実際に触れたデカルトの動物機械論は、そもそもまだ素朴な段階のものにすぎなかった可能性がある。パスカルの動物機械論の理解は、ポール＝ロワイヤルの隠士たちによるデカルト主義の理解と大差なかったのではなからうか。

パスカルがデカルトの動物機械論においてはっきりと拒否した点は、少なくともひとつある。それは、「魂の不死性」についての態度である。デカルトは、人間と動物の魂が異なる性質をもつ(あるいは人間のもつ魂が動物においては認められない)という事実は、人間の魂が身体とともに死なないことを示すものと考えていた。一方、パスカルにおいては、不

死の魂を人間と動物の区別の基準にする視点は存在しない。護教論者にとって、魂の不死性は解き明かされない謎として説明される。「魂が死すべきものか不死のものかを知るのは一生を通じて大切な問題³¹」なのである。「神の探求をうながす手紙」と題された断章では、次のように言われる。

14 S681-L427 [1219]

L'immortalité de l'âme est une chose qui nous importe si fort, qui nous touche si profondément, qu'il faut avoir perdu tout sentiment pour être dans l'indifférence de savoir ce qui en est. Toutes nos actions et nos pensées doivent prendre des routes si différentes, selon qu'il y aura des biens éternels à espérer ou non, qu'il est impossible de faire une démarche avec sens et jugement, qu'en la réglant par la vue de ce point, qui doit être notre dernier objet³².

魂の不死性はわれわれにとってきわめて重要で、われわれにまことに深く関係することがらであって、感覚をすっかり失ってしまったのでもないかぎり、この問題について知ることに関心ではいられないはずだ。永遠の善に対する希望があるかどうかによって、われわれのあらゆる行動と思考がまったく異なる道をとることになるのだから、われわれの最終目的であるこの点をしっかり見すえて歩かなければ、良識と判断をもって進むことができないのである。

希望しうる永遠の幸福が存在するかどうかによって、「われわれのあらゆる行動と思考がまったく異なった道をとる」という。精神の不死の問題は、こうして、人間が考え、神に回答を求めべき永遠の課題であって、科学的知見によって証明される問題ではとうていありえなかったのである³³。

『パンセ』の動物機械論を示唆する断章群から理解できるたしかなことは、人間に精神ないしは理性を認め、動物には本能を所属させることによって、動物と人間の存在論的差異をもうけたということであろう³⁴。このような見地は、『真空論序言』の次の一節によって、『護教論』の構想がまとまる7年も前の1651年にすでに準備されていた。

15 Pascal, *Préface sur le traité du vide*, MES, II, p. 781

N'est-ce pas indignement traiter la raison de l'homme, et la mettre en parallèle avec l'instinct des animaux, puisqu'on en ôte la principale différence, qui consiste en ce que les effets du raisonnement augmentent sans cesse, au lieu que les autres demeurent toujours dans un état égal ?

動物の本能と同列に置くのは、人間の理性を不当にあつかうことではないだろうか。その場合、理性の働きの効果がたえず増大するのに対して、他方[動物の本能]の効果はつねに同じ状態にとどまるという、両者の主たる差異を、すっかり無視してしまうことになるのだから。

しかし、パスカルの動物観は単純なままではすまない。一方で、パスカルは人間と動物の間に同質性あるいは等価性の存在をも示唆するのである。このことは、『パンセ』に見られる以下の三つの主張によって了解される。

第一に、パスカルが再三強調する原罪の教義である。人間はいまや動物と等しい地位にあり、同じ「本性」をもつものとされる。

16 S149-L117

[...] nous reconnaissons que, sa nature étant aujourd’hui pareille à celle des animaux, il est déchu d’une meilleure nature qui lui était propre autrefois.

[...] 人間の本性はいまや動物の本性と等しい状態にある以上、人間がかつて固有に保持していたよりよい本性の状態から墮落してしまったのだということを、われわれは理解するのである。

第二に、『真空論序言』では人間を動物から区別する基準とされていた「理性」が、『護教論』において、まことに無力なものとして説明されているのは周知のことである。人間は自分の理性よりも「想像力」にずっと強く支配されている³⁵のであるし、原罪による本性の墮落以後は、人間は「みずからの存在を構成する理性によっては行動しない³⁶」で、「感覚」が理性を抑えつけている。

17 S182-L149 [919-920]

Les sens indépendants de la raison et souvent maîtres de la raison l’ont emporté [l’homme] à la recherche des plaisirs.

感覚は、理性から独立し、しばしば理性の主人となることによって、人間を快樂の追求に駆り立てるようになった。

そして、パスカルが人間と動物との間に、差異と同時に共通点を認めていたことを示す第三の要素は、「本能」に帰された両義性である。さきほどは、パスカルにおいて、「本能」が動物を特徴づける重要な属性であることを確認した。実際、リシュレの辞書は、「本能」(instinct)の語を「動物について用いられ、自然的傾向を意味する」と規定しているし³⁷、アカデミーの辞書には、「自然が動物に与えた、よいものや悪いものを見分けるための何らかの感情や運動」と記されている³⁸。「本能」は「精神」(esprit)と対立し³⁹、動物がもつ身体に起因する能力とみなされるのである。ところが『パンセ』においては、この「本能」が、明白に人間の能力に含まれている。

18 S161-L128

Deux choses instruisent l’homme de toute sa nature : l’instinct et l’expérience.

次の二つが人間に、おのれの本性がいかなるものかをあますことなく教える。その二つとは、本能と経験のことである。

またある断章では、「推論によってわれわれに与えられるいかなる認識にも劣らず堅固な認識」と説明される「空間、時間、運動、数、が存在するというような第一原理の認識」が、「この心と本能による認識」と言いかえられているし、また同じ断章で、「本能」が« sentiment »（直感、感覚）と同義語として用いられ、同じような機能をもつことが示唆される。

19 S142-L110

Plût à Dieu que [...] nous connussions toutes choses par instinct et par sentiment !⁴⁰

われわれは、すべてのことがらを本能と直感によって知ることができればよかったのに！

« sentiment » は人間に帰属し、幾何学、美、道徳などの領域に関わるありとあらゆる判断や、とりわけ信仰において重要な働きを示す、認識のひとつの手段なのである⁴¹。

2) 「動物」と『護教論』の意図

このように、『パンセ』のなかには、パスカルがデカルト主義の影響のもとに動物機械論に共鳴し、人間と動物の特性を区別する一方で、その主張をみずから緩和する態度もうかがえる。この点でとりわけ興味深いのは、次の断章である。ここでパスカルは、人間のなかに、機械にたとえられるような側面を見いだしている。

20 S661-L821

Car il ne faut pas se méconnaître : nous sommes automate autant qu'esprit. Et de là vient que l'instrument par lequel la persuasion se fait n'est pas la seule démonstration. Combien y a-t-il peu de choses démontrées ! Les preuves ne convainquent que l'esprit ; la coutume fait nos preuves les plus fortes et les plus crues : elle incline l'automate, qui entraîne l'esprit sans qu'il y pense.

勘ちがいしてはならない。われわれは精神と同じくらい自動人形である。だからこそ、納得のための道具は、論証だけにかぎらないのだ。そもそも、論証済みのことがらなど、いかにわずかしかかないことか！証拠は精神しか納得させない。習慣は証拠をもっとも堅固にし、もっとも強く信じさせる。習慣は自動人形を傾け、精神は知らぬまに自動人形に引きずられていく。

われわれは、いかに緻密に論理を積み重ねた証明によっても必ずしも説得されない。それは、われわれが精神であるとともに自動人形でもあるからだという。論証は精神にしか訴えかけないのであって、あと半分の機械の部分を納得させるためには「習慣」に頼るしかない。逆

に、習慣によって自動人形を納得させれば、論証など経ずとも、人間は不動の信を得る。パスカルは問う。

21 S661-L821

Qui a démontré qu'il sera demain jour, et que nous mourrons ? Et qu'y a-t-il de plus cru ?

明日がやってくることや、われわれ人間はいずれ死ぬということを、いったい誰が論証したでしょうか。だがこれ以上に固く信じられていることはあるでしょうか。

われわれがこれらの命題を疑わないのは、習慣のなせるわざである。

また、われわれは、職業選択などの人生の重大事をも、習慣にゆだねている。

22 S527-L634

La coutume fait les maçons, soldats, couvreurs. C'est un excellent couvreur, dit-on. Et en parlant des soldats : Ils sont bien fous, dit-on. Et les autres au contraire : Il n'y a rien de grand que la guerre, le reste des hommes sont des coquins. À force d'ouïr louer en l'enfance ces métiers et mépriser tous les autres, on choisit.

習慣が石工、兵士、屋根葺き職人をつくる。人は「彼はたいした屋根葺きだ」などと言う。また兵士について「やつらは頭が変だ (fous)」などと言う。かと思えば、「戦争ほど偉大なものはない。兵士でない男などげす野郎だ」と言う者もいる。子どものときにある職業が誉められ、その他の職業がけなされるのを耳にすることで、人は職を選ぶのだ。

習慣はわれわれの真偽、善悪、美醜の判断をも左右してしまう。われわれの判断を決定づけているのは、偶然であり、他者である。

パスカルはしかし、人間のこうした機械的性向を嘆くのも、批判するのもない。それどころか彼は、これを利用して読者を信仰に誘おうと試みるのである。次は、自著の論述の方針（「順序」）についてのメモである。

23 S45-L11

Ordre.

Après la lettre qu'on doit chercher Dieu, faire la lettre d'ôter les obstacles, qui est le discours de la machine, de préparer la machine, de chercher par raison.

順序。

神を探求すべきであるとの手紙のあと、[その] 障害を取り除くための手紙を書くこと。それはすなわち、機械についての論述、機械を準備し、理性をもって探究することに誘う論述である。

上の「手紙」という語は、パスカルが『護教論』の少なくとも一部を書簡形式の対話によって書こうとしていたことを示唆する。彼は仮想的対話者の不信仰者に対して、神の探求を促す手紙に続けて、その障害を取り除く方策を伝える手紙を書くのだという。この「障害」とは人間のさまざまな情念、すなわち邪欲、とりわけ自己愛のことである。パスカルは、神への愛の最大の障害が自己愛であることをくり返し強調している。そして、その情念を棄てさせるための論述が、そのまま「機械」についての論述になるのだという。

この論述は、いわゆる「賭け」の断章の次の一節に関係すると推測される。護教論者が、「神あり」への賭け——すなわち信仰——をためらう友人に助言する場面である。

24 S680-L418 [1214-1215]

Travaillez donc, non pas à vous convaincre par l'augmentation des preuves de Dieu, mais par la diminution de vos passions. Vous voulez aller à la foi, et vous n'en savez pas le chemin ? Vous voulez vous guérir de l'infidélité, et vous en demandez les remèdes ? Apprenez de ceux qui ont été liés comme vous et qui parient maintenant tout leur bien : ce sont gens qui savent ce chemin que vous voudriez suivre et guéris d'un mal dont vous voulez guérir. Suivez la manière par où ils ont commencé : c'est en faisant tout comme s'ils croyaient, en prenant de l'eau bénite, en faisant dire des messes, etc. Naturellement même cela vous fera croire et vous abêtira.

であれば、自分を納得させるために、神の証拠をならべ立てるのではなく、君自身の情欲を減らすように努めることだよ。君は信に向かいたいと願いながら、その方法を知らないのだろう。不信仰という病を癒やしたいと願い、その薬を求めているのだろう。それなら、かつては君と同じく手足を縛られていて、いまはすべてを賭けに差し出している人たちを見習うといい。君がたどるべき道を知っていて、君が治したい病から快復した人たちだ。彼らが手はじめに取った方法をまねるといい。つまり、まるで信じているかのようにふるまうのだ。聖水を授かったり、ミサを唱えてもらったりするのだ。そうすれば、あたかも自然に信じられるようになり、馬鹿になれるだろう。

「馬鹿になる」という語が象徴的に示すように、パスカルにおいて信仰は、知性や理性（のみ）によって得られるものではない。信仰に至るためにはむしろ、少なくとも一時的に精神の営みを意図的に中断し、自己を他者と偶然に完全にゆだねなければならない。そしてまた、そのような思考の中断には、他者の動作の模倣というかたちで、身体が動作が大きく関与している。身体は邪欲の源泉でありながら、信仰の枢要な契機をなすのである。

ここで、「自動人形」や「機械」になぞられる身体は、デカルト主義的思想の影響下でパスカルによって同じく機械と同一視される動物のアナロジーと考えても差し支えないだろう。この場合、パスカルは、いわば人間に内在する動物性を、信仰への接近に利用する論述を構想していたことになる。

このように、『パンセ』のなかには、動物と人間を截然と区別する主張、人間のなかに動物の本能を見いだす主張、そして、人間がみずからの動物性を信仰の獲得に利用しうる可能性を示唆する主張が混在している。これら三つの主張の間にゆるやかな一貫性を認めることは許されないだろうか。パスカルは『キリスト教護教論』で、第一に、動物の存在論的価値をデカルト主義的動物機械論によって規定することで、人間の位相からはっきり区別し、第二に、いったん人間から遠ざけた動物性を人間のなかにも指摘することを経て、第三に、そのような動物性（身体性）が命題に対する確信を与える効果を利用して宗教的信に接近すべきこと、さらに言えば、そうすることによって、「原罪による墮落」によってひとたびは失われた「神への愛」の高みに到達する可能性を示唆する論述を行おうと意図したのではないだろうか。

詳しい考察は割愛するが、とりわけ『パンセ』の「偉大さ」の章（セリエ版で第7章）に含まれる諸断章では、「動物」の概念が、護教論者と対話者に共通するひとつの典型的な了解事項としての価値をもっている。動物の機械性および人間との存在論的差異は当時の広く行き渡った認識とかけ離れたものではない。パスカルはこの常識的な主張から始めることで、相手の立場にまずは立とうとしたのではないだろうか⁴²。この点、モンテーニュの動物賞讃論は、逆に常識とは正反対の説とみなされて、排除された可能性が高い。

このように、パスカルの動物機械論を『護教論』の論述内容に組みこんで解釈することが許されるとすれば、パスカルが、デカルトが意図したような自然学体系の一部を構成する動物論を受けつぐ理由はまったくなかったことも理解できる。パスカルにとって、動物は等しく思考をもたぬ機械であって、生命や感覚と思考の連続性または差異という哲学的な問題など考察の対象ではなかったのだ。『パンセ』における「動物」は、ちょうど『パンセ』における「ユダヤ民族」という語がそうであったように、まったく現実を参照しない議論上の記号であって差し支えなかったのである。

引用凡例

1. パスカルの著作

1) 『パンセ』

Pascal, *Les Provinciales, Pensées et opuscules divers*, textes édités par G. Ferreyrolles et Ph. Sellier, Paris, Librairie Générale Française, « La Pochothèque », 2004.

本書の断章番号を記号 S (Sellier) とともに示し、ラフユマ版 (éd. L. Lafuma, Paris, Luxembourg, 1952) による断章番号を記号 L とともに付記する。長い断章からの引用の場合は [] 内に頁番号を付す。例 : S681-L427 [1221-1222].

2) 『サンシ氏との対話』

Pascal, *L'Entretien avec M. de Sacy*, éd. P. Mengotti et J. Mesnard, Paris, Desclée de Brouwer, « Les Carnets », 1994. [略号 *Entretien*]

3) その他の著作

Pascal, *Œuvres complètes*, éd. J. Mesnard, tomes I-IV, Paris, Desclée de Brouwer, 1964-1992. [略号 *MES*]

2. デカルトの著作

次のいずれかから引用する。

Descartes, *Œuvres*, éd. Ch. Adam et P. Tannery, Paris, Vrin, nouvelle édition, 1996, 11 vol. [略号 A7]

Descartes, *Œuvres philosophiques*, éd. F. Alquié, Paris, Bordas, « Classiques Garnier », 1988-1989, 3 vol. [略号 ALQ]

参考文献

BOUCHILLOUX (Hélène), *Apologétique et raison dans les Pensées de Pascal*, Paris, Klincksieck, 1995 (Chapitre VI : « Pascal et Descartes »).

BRUNSCHVIG (Léon) (éd.), Pascal, *Pensées et Opuscules*, Paris, Hachette, 1897 ; rééd., 1990.

BUSSON (Henri), « La Fontaine et l'âme des bêtes », in *Revue d'histoire littéraire*, 1935.

CROQUETTE (Bernard), *Pascal et Montaigne. Étude des réminiscences des Essais dans l'œuvre de Pascal*, Genève, Droz, 1974.

DELFORGE (Frédéric), *Les Petites Écoles de Port-Royal. 1637-1660*, Paris, Cerf, 1985.

DESGRIPPES (Georges), *Études sur Pascal. De l'automatisme à la foi*, Paris, Pierre Téqui, 1935.

FONTENAY (Élisabeth de), *Le Silence des bêtes. La philosophie à l'épreuve de l'animalité*, Paris, Fayard, 1998 [邦訳 : エリザベート・ド・フォントネ『動物たちの沈黙—<動物性>をめぐる哲学試論』石田和男・小幡谷友二・早川文敏訳、彩流社、2008年].

GONTIER (Therry), *De l'homme à l'animal. Paradoxes sur la nature des animaux. Montaigne et Descartes*, Paris, Vrin, « Philologie et Mercure », 1998.

GOUHIER (Henri), *Cartésianisme et Augustinisme au XVII^e siècle*, Paris, Vrin, 1978.

LE GUERN (Michel), *Pascal et Descartes*, Paris, Nizet, 1971.

LEWIS (Geneviève), « Augustinisme et cartésianisme à Port-Royal », in E. J. Dijksterhuis *et al.*, *Descartes et le cartésianisme hollandais. Études et documents*, Amsterdam et Paris, PUF, 1950, p. 131-182.

前田陽一『モンテーニュとパスカルとのキリスト教弁証論』東京創元社、1989年。

McKENNA (Antony), « Une question de cohérence : l'argument *ad hominem* dans les *Pensées* de Pascal », in *Littératures classiques*, n° 20, supplément 1994, p. 23-40.

MESNARD (Jean), *Les Pensées de Pascal*, Paris, SEDES, 1976 ; 2^e éd., 1993.

NORMAN (Buford), *Portraits of Thought, Knowledge, Methods and Styles in Pascal*, Columbus, Ohio University Press, 1988.

ORCIBAL (Jean), « Descartes et sa philosophie jugés à l'hôtel de Liancourt (1669-1674) », in E. J. Dijksterhuis *et al.*, *Descartes et le cartésianisme hollandais. Études et documents*, Amsterdam et Paris, PUF, 1950, p. 87-107.

SAINTE-BEUVE (Charles-Augustin), *Port-Royal*, éd. M. Leroy, Paris, Gallimard, « Pléiade », 3 vol.

SELLIER (Philippe) (éd.), Pascal, *Pensées*, Paris, Bordas, « Classiques Garnier », 1991.

谷川多佳子「デカルトの動物機械論」、『フランス語フランス文学研究』35号、1979、1-9頁。

山上浩嗣『パスカルと身体の生』大阪大学出版会、2014年。

Dossier thématique : « l'âme des bêtes », sur *L'Édition électronique des Pensées*, par D. Descotes et Gilles Proust, <http://www.penseesdepascal.fr/General/Lamedesbetes.php>

¹ 1) パスカル : « Bassesse de l'homme jusqu'à se soumettre aux bêtes, jusques à les adorer. » (S86)

2) モンテーニュ : 「さらにわれわれのもっている才能で、動物の行為の中に見られないものが何かあるだろうか。ミツバチの社会以上に秩序が整い、役目や職権が細分され、揺るぎなく維持されている

国家があるだろうか。これほど整然とした行為や職務の配分が、理性も思慮もなしに行われると考えられるだろうか」（三、38頁）。

パスカル：「それは、人間の理性に対して、それにふさわしい扱いをしないことではないか。人間の理性を、動物の本能と同列に置いて、比較することではないか、なぜならそれは、人間の理性から、動物との主要な相違を取り上げてしまうことだからである。その主要な相違とは、推論の結果は絶えず増加するのに対し、動物の本能の結果は、つねに同じ状態にとどまるという点にあるのだ。ミツバチの巣は、千年前も、今日と同じくきちんと計算されており、それぞれの巣は、最初のときも、最後のときにも、等しく正確な六角形を形づくっている。動物が、その不可思議な働きによって作り出す、すべてのものについて同じことが言える。[...] なぜなら（母なる）自然は、動物たちを、限られた完全性の秩序のなかに維持することのみを目的としているので、彼らが衰退に陥りはしないかと恐れて、この必要な知識を彼らに与え、（その知識は）つねに同じ（ままである）が、また自然は、彼らが自然の命じる限界を超えはしないかと恐れて、彼らがそこに何ものかをつけ加えることは許さない」（『メナール版パスカル全集1』170-171頁）。

3) モンテーニュ：「この行為は、王のユバが語る象どもの話にいくらか似ている。すなわち、象のなかの一頭が、象狩りの人々の計略にかかって、灌木をかぶせてごまかしある深い落とし穴に落ち込んだときに、仲間の象どもが大急ぎで石や木片をいっぱい運んできてなかに投げ入れ、落ちた象が外へ出られるようにしてやったというのである」（三、56頁）。

パスカル：「もしある動物が、狩りの最中に獲物を見つけたとか見失ったとかを仲間に知らせようとして、本能ではなく精神によって行動し、本能ではなく精神によって語っているのだとしよう。するとその動物は、もっと切実なことがらについてもしっかり話すことだろう。たとえばこんなふうに。「痛いよ、この縄をかみ切ってくれないか。ぼくには手が届かないんだ」（S137-L105）。

² *La Logique ou l'art de penser*, éd. D. Descotes, 2014, III, 19, p. 464-465 :

« C'est ce qui fait voir qu'un des caractères des plus indignes d'un honnête homme, est celui que Montaigne a affecté, de n'entretenir ses lecteurs que de ses humeurs, de ses inclinations, de ses fantaisies, de ses maladies, de ses vertus et de ses vices ; et qu'il ne naît que d'un défaut de jugement aussi bien que d'un violent amour de soi-même. »

³ Voir *Pensées*, éd. Philippe Sellier, Paris, Bordas, « Classiques Garnier », 1991, p. 426, n. 11 など。

⁴ « [...] cette opinion des automates est ce que M. Pascal estimait le plus dans la philosophie de M. Descartes » (A. Baillet, *Vie de Descartes*, phrase citée par G. Desgrippes, *Études sur Pascal. De l'automatisme à la foi*, Paris, Pierre Téqui, 1935, p. 108).

⁵ 『哲学原理』の「著者から仏訳者への手紙」において、デカルトは自然学全体に対する壮大な野心を告白している。「[...] afin de conduire ce dessein jusqu'à la fin, je devrais ci-après expliquer en même façon la nature de chacun des autres corps plus particuliers qui font sur la terre, à savoir des minéraux, des plantes, des animaux, et principalement de l'homme ; puis, enfin, traiter exactement de la médecine, de la morale, et des mécaniques » (*Principes de la philosophie*, « Lettre de l'auteur », AT, IX-2, p. 17).

⁶ 山上浩嗣『パスカルと身体の生』大阪大学出版会、2014年、89-91頁を参照。

⁷ この断章は、書かれた紙の裏面の断章（S117-L83）を活かすために、一本の線で課されている。Cf. S462-L553 : « Écrire contre ceux qui approfondissent trop les sciences. Descartes. »

⁸ Voir Lettre au Marquis de Newcastle, 23 nov. 1646, AT, IV, p. 575 (nous modernisons l'orthographe) : « Je sais bien que les bêtes font beaucoup de choses mieux que nous, mais je ne m'en étonne pas ; car cela même sert à prouver qu'elles agissent naturellement et par ressorts,

ainsi qu'une horloge, laquelle montre bien mieux l'heure qu'il est, que notre jugement ne nous l'enseigne. »

⁹ Voir *Discours de la méthode*, 5, AT, VI, p. 57-58 (nous modernisons l'orthographe) : « Or, par ces deux mêmes moyens, on peut aussi connaître la différence, qui est entre les hommes et les bêtes. Car c'est une chose bien remarquable, qu'il n'y a point d'hommes si hébétés et si stupides, sans en excepter même les insensés, qu'ils ne soient capables d'arranger ensemble diverses paroles, et d'en composer un discours par lequel ils fassent entendre leurs pensées ; et qu'au contraire, il n'y a point d'autre animal, tant parfait et tant heureusement né qu'il puisse être, qui fasse le semblable. Ce qui n'arrive pas de ce qu'ils ont faute d'organes, car on voit que les pies et les perroquets peuvent proférer des paroles ainsi que nous, et toutefois ne peuvent parler ainsi que nous, c'est-à-dire, en témoignant qu'ils pensent ce qu'ils disent ; au lieu que les hommes qui, étant nés sourds et muets, sont privés des organes qui servent aux autres pour parler, autant ou plus que les bêtes, ont coutume d'inventer d'eux-mêmes quelques signes, par lesquels ils se font entendre à ceux qui, étant ordinairement avec eux, ont loisir d'apprendre leur langue. »

¹⁰ 次の論考は、この点にデカルトの論理の破綻を認め、デカルトの動物機械論を、彼の思想体系のなかで非合理的なものとは合理的なものとの交錯する場のひとつであるとみなす興味深い研究である。谷川多佳子「デカルトの動物機械論」、『フランス語フランス文学研究』35号、1979、1-9頁。

¹¹ Lettre à Morus, 5 fév. 1649, *ALQ*, III, p. 884 : « j'ai tenu pour démontré que nous ne pouvions prouver en aucune manière qu'il y eût dans les animaux une âme qui pensât. »

¹² Lettre à Morus, 5 fév. 1649, *ALQ*, III, p. 887 (nous modernisons l'orthographe) : « Je passe, pour abrégé, les autres raisons qui ôtent la pensée aux bêtes. Il faut pourtant remarquer que je parle de la pensée, non de la vie, ou du sentiment ; car je n'ôte la vie à aucun animal, ne la faisant consister que dans la seule chaleur du cœur. Je ne leur refuse pas même le sentiment autant qu'il dépend des organes du corps. Ainsi mon opinion n'est pas si cruelle aux animaux qu'elle est favorable aux hommes, je dis à ceux qui ne sont point attachés aux rêveries de Pythagore, puisqu'elle les garantit du soupçon même de crime quand ils mangent ou tuent les animaux. Je me suis peut-être plus étendu qu'il ne fallait, et que la vivacité de <votre> esprit ne le demandait ; mais j'ai voulu vous montrer par là que, de toutes les objections qu'on m'a faites jusque ici, il n'y en a aucunes qui m'aient été aussi agréables que les vôtres, et que vos manières honnêtes et votre candeur vous ont entièrement gagné celui qui a un attachement invariable pour tous les amateurs de la véritable philosophie. »

¹³ *ALQ*, III, p. 885, n. 3.

¹⁴ 『ポール＝ロワイヤル回想録』、1736年。Nicolas Fontaine, *Mémoires ou histoire des solitaires de Port-Royal*, éd. Pascale Thouvenin, Paris, Champion, 2001, p. 595.

¹⁵ [Furetière] AUTOMATE. subst. masc.

Terme des Mécaniques. Machine qui se remuë toute seule, qui a en soy le principe de son mouvement, comme une montre, une horloge à contrepoids, ou autres machines qui se meuvent par ressort. On prononce *aftomate*; et ce mot est purement Grec. Descartes est d'opinion que les brutes ne sont que des *automates*; et cette opinion n'est pas nouvelle. Ce mot vient du Grec *autos*, *ipse*.

¹⁶ サント＝ブーヴはアルノーについて次のような逸話を紹介している。「Arnauld eût répondu et répondait, comme plus tard Malebranche donnant un grand coup de pied à sa chienne : *Eh quoi !*

ne savez-vous pas bien que cela ne sent pas ? » (Ch.-A. Sainte-Beuve, *Port-Royal*, éd. M. Leroy, Paris, Gallimard, « Pléiade », 3 vol., I, p. 758).

¹⁷ Voir *Ibid.*, III, p. 322.

¹⁸ Voir Desgrippes, *op. cit.*, p. 110-113.

¹⁹ Sainte-Beuve, *op. cit.*, III, p. 322.

²⁰ *Entretien avec M. de Sacy*, *op. cit.*, p. 85-86.

²¹ « Mais puis-je oublier le plaisant entretien, où ce bon Seigneur ferma la bouche à M. Arnaud, tout savant qu'il étoit ? On parloit de la philosophie de M. Descartes, qui étoit alors l'entre[c]lien de toutes les compagnies. M. Arnaud qui avoit un esprit universal & qui étoit entré dans le sistème de Descartes sur les bêtes, soutenoit que ce n'étoient que des horloges, et que quand elles crioient ce n'étoit qu'une roue d'horloge qui faisoit du bruit. M. de Liancourt lui dit : "J'ai là bas deux chiens qui tournent la broche chacun leur jour. L'un s'en trouvant embarasse se cacha lorsqu'on l'alloit prendre, et on eut recours à son camarade pour tourner au lieu de lui. Le camarade cria, et fit signe de sa queue qu'on le suivît. Il alla dénicher l'autre dans le grenier et le houspilla. Sont-ce là des horloges?" dit-il, à M. Arnaud qui trouva cela si plaisant, qu'il ne put faire autre chose que d'en rire. » (Nicolas Fontaine, *Mémoires pour servir à l'histoire de Port-Royal*. 2 vol., Utrecht, 1736, tome II, p. 470 ; Genève, Slatkine Reprints, 1970, p. 259). Voir Pascal, *Pensées et Opuscules*, éd. L. Brunschvicg, Paris, Hachette, 1897 ; rééd., 1990, p. 487, n. 1.

²² Cf. *Pensées*, éd. Sellier, éd. cit., p. 426, n. 11.

²³ Voir Frédéric Delforge, *Les Petites Écoles de Port-Royal. 1637-1660*, Paris, Cerf, 1985, p. 96.

²⁴ 1660年代に多くの知識人を集めたパリのサロンのひとつであったリアンクール邸では、ソシニスム（三位一体とイエスの神性を否定したイタリアの異端者ソツツィーニの教説）と呼ばれる潮流の台頭が心配された。その際にもっとも活発に議論にのぼったのが動物の精神についてであった。Voir Jean Orcibal, « Descartes et sa philosophie jugés à l'hôtel de Liancourt (1669-1674) », in E. J. Dijksterhuis *et al.*, *Descartes et le cartésianisme hollandais. Études et documents*, Amsterdam et Paris, PUF, 1950, p. 87-107.

²⁵ 1663～1678年。この間、Louis De La Forge, Le Père Poisson, Ambrosius Victor, Le Père Nicolas Malebranche, Le Père Pardies, Antoine Dilly, Le Père Jean-Baptiste De la Grange, Jean-Baptiste Duhamelらが論争に加わった。次を参照。Henri Gouhier, *Cartésianisme et Augustinisme au XVII^e siècle*, Paris, Vrin, 1978, chapitre VI, 1 : « Sur l'âme des bêtes », p. 147-153.

²⁶ デュアメルはパスカルの思想を賞讃している。次を参照。Henri Busson, « La Fontaine et l'âme des bêtes », in *Revue d'histoire littéraire*, 1935, p. 7.

²⁷ Voir H. Gouhier, *op. cit.*, p. 147-153. G・(ロディス=)レヴィスが報告するデュ・ヴォーセル (Du Vaucel) のデカルト批判も同じ立場からのものである。デュ・ヴォーセルによれば、アウグスティヌスが感覚を「精神の身体におよぼす影響」と規定しているが、だからといってデカルトのように、動物には感覚がないということにはならず、むしろ動物にも感じる事ができ、精神をももちうるものであった。デュ・ヴォーセルはデカルトの機械論的自然観を、聖書に示された想像の偉大さを小さく見積もるものだと批判する。Voir Geneviève Lewis, « Augustinisme et cartésianisme à Port-Royal », in *Descartes et le cartésianisme hollandais*, *op. cit.*, p. 131-182.

²⁸ セリエ版の注によると、『哲学原理』は断章 S230-L199、S565-L682に、『情念論』は断章 S118-L84、S565-L686に、そして1645年2月9日付けメラン神父への手紙は S794-L959と関連づけられ、パスカルによってデカルトの作品が実際に読まれたことが示されている（各断章の注を参照）。

²⁹ Michel Le Guern, *Pascal et Descartes*, Paris, Nizet, 1971. なお、H・ブシユーは、ルゲルンの説を修正する見解を発表している（Hélène Bouchilloux, *Apologétique et raison dans les Pensées de Pascal*, Paris, Klincksieck, 1995, Chapitre VI : « Pascal et Descartes »）。彼女は同時に、パスカルとデカルトの共通点と相違点を、とくに、形而上学に対する態度、理性の限界、思考の物質に対する優位性、機械論、などの点において検証している。

³⁰ M. Le Guern, *op. cit.*, p. 50-54.

³¹ S196-L164.

³² Cf. S505-L612.

³³ Cf. S690-L448.

³⁴ 次の断章は、「思考」の存否によって人間と動物を区別している。S143-L111 : « Je puis bien concevoir un homme sans mains, pieds, tête, car ce n'est que l'expérience qui nous apprend que la tête est plus nécessaire que les pieds. Mais je ne puis concevoir l'homme sans pensée. Ce serait une pierre ou une brute. »

³⁵ Voir S78-L44, S78-L45.

³⁶ S736-L491 [1288] : « Nature corrompue. / L'homme n'agit point par la raison, qui fait son être. »

³⁷ P. Richelet, *Dictionnaire français*, Genève, J.-H. Widerhold, 1680 ; Genève, Slatkine Reprints, 1970, 2 vol., art. « instinct ».

³⁸ *Dictionnaire de l'Académie française, dédié au Roi*, J.-B. Coignard, 1694 ; réimpression, 1901, 2 vol., art. « instinct ». この辞書は次のようにつけ加えている。« Il [= le mot instinct] se dit aussi de l'homme et se prend pour un premier mouvement sans réflexion. »

³⁹ Voir S137-L105 (本論冒頭に引用)。

⁴⁰ この語は「感情」「感覚」「直感」などの広範な意味領域をもつ。なお、「sentiment」の『護教論』における意義については、別の機会にすでに詳しく考察したので、ここではくり返さない。その多義性についてや、とくに、この語が、同様に複数の意義をもつ「理性」との間で複雑な対立を示し、『護教論』において信仰に接近できる可能性を付与されるに至る経緯について、次の拙論を参照。「信仰と理性—パスカル『キリスト教護教論』における「sentiment」の意義」(『仏文研究』24号、1993年、9-34頁)。「sentiment」が信仰において特権的な価値をもつことについては、断章 S142-L110 の末尾部分をもっとも明らかに示している。

⁴¹ instinct と sentiment の相似性については、次を参照。Buford Norman, *Portraits of Thought, Knowledge, Methods and Styles in Pascal*, Columbus, Ohio University Press, 1988, p. 29.

⁴² A・マッケンナは、パスカルの論述を「対人論証」、すなわち、「対話者によって認められた原理に即して行う論述」ととらえ、その原理が「人間の身体」に関することがらであると主張している。次を参照。Antony McKenna, « Une question de cohérence : l'argument *ad hominem* dans les *Pensées* de Pascal », in *Littératures classiques*, n° 20, supplément 1994, p. 23-40.